



TITLE:

# 京都大学瀬戸臨海実験所振興会水族館月報 No. 42

AUTHOR(S):

---

CITATION:

京都大学瀬戸臨海実験所振興会水族館月報 No. 42. 京都大学瀬戸臨海実験所振興会水族館月報 1956, 42: 43-48

ISSUE DATE:

1956-03-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/186832>

RIGHT:

録 事

終戦後より、実験所正門前に数多くの立札が林立し、無体裁をさわつていた上に、バスを待つ観光客が腰をおろしたり等して堤がくずれてきたので、この機会に町当局や明光バスに願つて、これらの立札を全部除けてもらい、正門左右に石垣を築いてきれいに整備した。これで見に目にもスッキリしたものに映じることとなつた。

時岡委員は2月3日午前10時、神戸出港の新日本汽船阿蘇丸(7千吨)で渡米の途についた。17日、ロサンジェルス郊外のサンパドロ港に安着の才1報あり、つづいて腰をおちつけたラホヤ海洋学研究所における1週間の動静や、付設の水族館の模様につき、初の音信があつた。水族館では博物館活動に役立つような書物を一通り賣つている由。

桜咲く春の観光にさきがけて、白浜観光協会では3月上旬から中旬にかけて、関西一帯の空から、白浜を紹介するために大々的に宣伝ビラをまく由、新聞が報じている。これにこたえて当水族館もますます整備されなければならない。近隣地区でも、番所山植物園では、4月から神戸の日生貿易の出資で動物園を併設する計画で、目下予定地とされる井戸の谷に通ずる索道とトンネルを建設中である。また正門前では、乙姫プールの敷地一部を買収し、喫茶食堂を設ける計画もあると聞いたので、白浜唯一の風致及文教地区保全に遺憾のないよう、実験所を中心として協力してもらうよう、要望しておいた。

## 業 務 概 況

### ◎ 2月の入場者数

区 分	水族館 発券数		明光バス 発券数		合 計	
	本月分計	累 計	本月分計	累 計	本月分計	累 計
大 人	5959	65555	14825	135893	20784	201448
小 人	117	4843	65	2736	182	2579
団 体	7968	91007	—	—	7968	91007
合 計	14044	161405	14890	138629	28934	300034
入場者 里親大会出席者 他					93	1663

### ◎ 2月の事業収入

(累 計)

観覧券売上金 ..... 552,823 ..... 5,484,009

魚類排下 ..... — ..... 5,670

諸 収 入 ..... 10 ..... 880

1月よりの繰越し ..... 569,001

計 ..... 1,121,834 ..... 5,495,559

### ◎ 2月の支出

#### 水族館経費

費 目	金 額	累 計	備 考
人件費	52,976	698,968	
合計費	—	440	
備品費	—	150,960	
消耗費	7,735	103,479	
事業費	39,619	434,978	
維持費	31,650	233,711	
其他諸経費	26,450	262,969	
積立金	94,336	936,675	
合 計	252,766	2822,180	

#### 実験所経費

費 目	金 額	累 計	備 考
研究費	15,000	108,000	内海毒研究費
奨学金	5,000	40,000	
備品費	—	660,015	
消耗費	—	14,500	
刊行費	180,000	509,576	論文紀要5巻1号
役務費	—	107,055	
合 計	200,000	1439,146	

## 博物館経費

費目	金額	累計	備考
人件費	4,900	57,080	
消耗費	24,575	33,968	超過印刷費
備品費	—	12,320	
合計	29,475	103,368	

## 臨時部

項目	金額	累計	備考
正門両側整備費	26,500	26,500	
合計	26,500	595,205	

## 支出合計

水族館経費	252,766	2,822,180
実験所経費	200,000	1,439,146
博物館経費	29,475	103,368
臨時費	26,500	595,205
計	508,741	4,959,899

2月末現在高 613,093

支出累計 4,959,899

## ◎ 前年度との比較

	1955	1956	増減
入場者数	21,831	28,934	+ 7,103
売上金	419,080	552,823	+ 133,743
支出金	188,780	508,741	+ 319,961

## 水族館記事

- ◎ 残っていたキグチウツボも、1日、4日、17日とつぎつぎに死んでゆき、絶えてしまったが、全部ホルマリンに漬けて保存することにした。
- ◎ 2月8日、珍しくも1匹のマンボウが実験所前のツボアミにひかかり、水族館に持ちこまれたが、わずか5日間生存したのみで、14日にはついに死亡したので内部を解剖して、ホルマリン漬とした。体長約1m、体高(背ひれの端から尻ひれの端まで)約1.30mで、マンボウとしてはそれほど大きいものではないが、剥製とするには(困難ではあるが)手頃なものだろう。なおその体には、3種類(ペンネラ、コンコデルマ、等脚類)の寄生虫がっていた。

- ◎ 冬には毎年はあるカンダイ(コブダイ)が今年は特に多く、大物が3日から14日にかけて4匹入ったが、2匹現存している。体色は赤色から紫褐色まであつて一見別物の感じがする位変異がある。
- ◎ ニシキエビが中旬に2匹死亡した。
- ◎ マダコ 1匹 14日に入槽した。
- ◎ アカウミガメ の赤坊がつぎつぎに死亡し、余すところ1匹となつてしまった。
- ◎ 26日より臨海浦の地曳網が開始された。

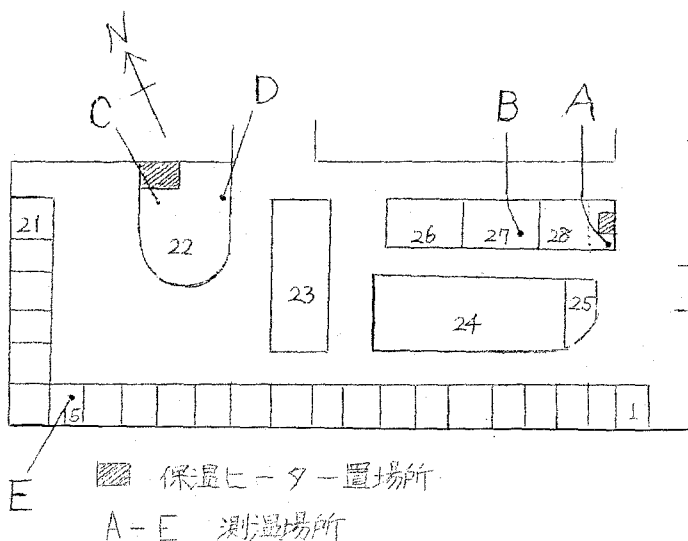
## 資 料

- ◎ 冬期における保温水槽の水温の日中変化。

冬期になると水槽内の水温が低下するために、本水族館では特に熱帯性の魚や魚及び仔魚を保護するために、二重螺旋式のヒーターをとりつけている。給水は上部に設置した小型の保温槽を通過して温められ、下の本水槽に流れる。設置場所は水槽28(A)及び水槽22(C)の上部である。前者は33Kwのヒーター

で100Voltの電燈線に通じ、後者は200Voltの動力線に通じている。

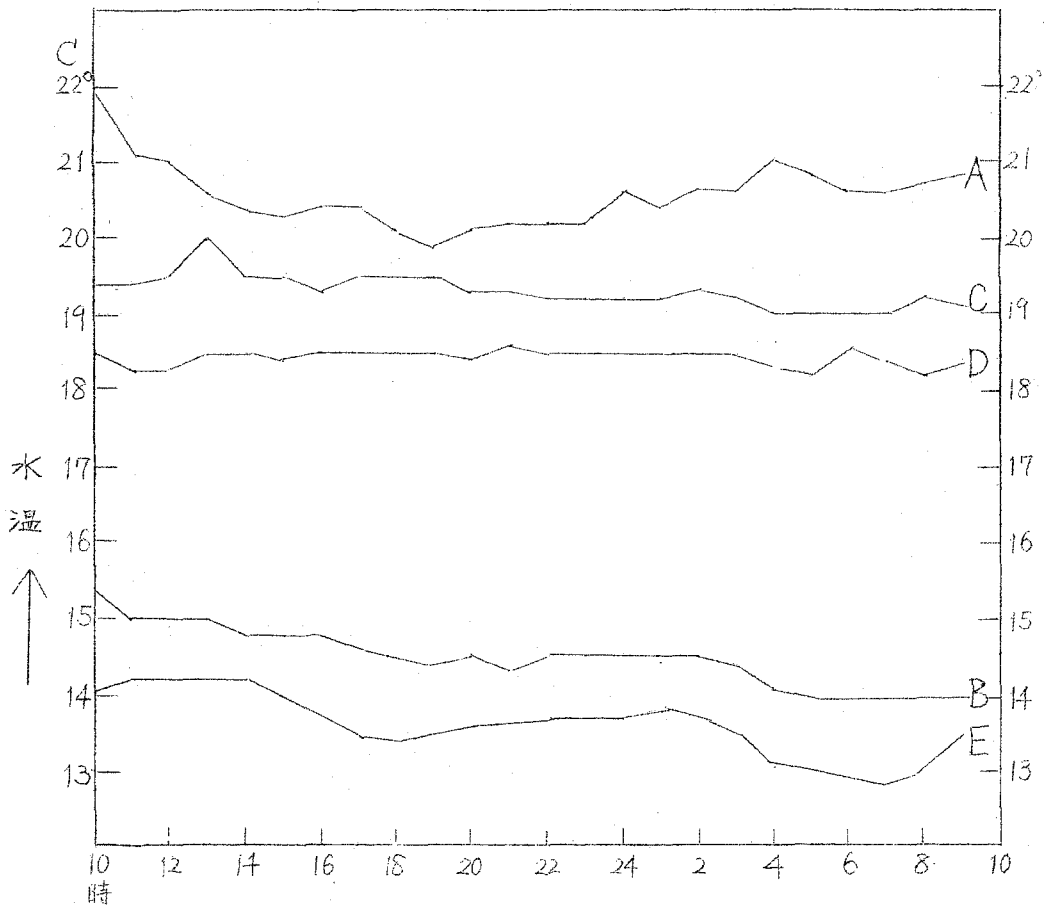
この冬、比較的寒いと思われた2月2日を期して、保温された水槽28及び22の水温測定が左海・近藤両館員によって行われた。测温した場所は★1圖に示したA-Eの5個所で、AとBは隔壁



によって仕切られているが、水は細孔を通じてAよりBに向つて流れる。Eは対照として、全然保温しない水槽を選んだ。当日の館内気温は午前10時現在で

12.9℃、水槽25の水温は13.9℃であった。

この昼夜観測の結果はオ2図に示すとおりである。簡単な観測ではあつたが、図表で見られるとおり、次のようなことが明らかにされたのは些細な収穫であらう。



オ 2 図

- (1) ヒーターは動力線を用いれば、昼夜を通じて、ほとんど温度差がない。
- (2) 広い水槽でも、その中に隔壁があれば、1個のヒーターで充分に間にあう。3m以上はなれても、水の交流があるので、電源より約1℃の差があるにすぎない。
- (3) 間に隔壁があつて、水の自由な交流が妨げられると、電源より距てられ隣の水槽でも、水温はほとんど無保温の水槽のそれと変りはない。

(4) 電燈線を利用するヒーターは夕方の7時頃、温度がもつとも低下する。

(5) 無保温でも、本水族館の水温は昼夜を通じて、障害となるような変動はおこらない。

### ◎ 2月の気象

	上旬	中旬	下旬
晴天日数(21)	8	6	7
気温(℃)	$\frac{7.0 - 12.9}{10.5}$	$\frac{6.0 - 13.0}{8.8}$	$\frac{6.0 - 11.6}{9.0}$
水温(℃)	$\frac{12.4 - 14.8}{13.8}$	$\frac{11.6 - 14.3}{12.3}$	$\frac{11.8 - 15.5}{13.0}$
比重	$\frac{26.0 - 26.2}{26.0}$	$\frac{25.0 - 26.5}{25.9}$	$\frac{26.0 - 26.5}{26.1}$

但し { 気温は南水槽室  
水温 } は No. 25 水槽 で 10 時に測定

### 来訪録

2月14日 三重県立大学水産学部長 岡田彌一郎博士は鳥羽水族館支配人 中村幸昭氏及びインドネシア及びヒリツピンの留学生を連れて来館。

2月27日 京都市紀念動物園の水族館主仕松井孝爾氏夫妻来館。

昭和31年3月3日 発行 (No. 42)

編集兼  
発行人

内 海 富 士 夫

発行所

瀬戸臨海実験所振興会

和歌山県・白浜町  
瀬戸臨海実験所 内  
(電話 白浜温泉 515)